



日本学士院ニュースレター

2017.4 No. 19



第26代日本学士院長に塩野 宏会員（選挙結果を受け、就任挨拶を行う塩野新院長）

日本学士院は、杉村 隆院長の任期満了に伴い、平成28年10月12日開催の第1102回総会において選挙を行い、塩野 宏会員を日本学士院長として選定しました（関連記事12ページ参照）

目次

平成29年度日本学士院賞.....	2	講演会レポート.....	13
会員寄稿（竹内 啓会員）.....	5	第66回公開講演会のお知らせ.....	14
第13回日本学士院学術奨励賞.....	6	本席 佑会員が京都賞受賞.....	14
新会員選定.....	8	岸本忠三会員がキング・ファイサル国際賞受賞.....	14
『学問の山なみ』から「歴史をつくった会員」.....	9	会館施設の利用案内.....	15
会員寄稿（杉村 隆会員）.....	10	第32回国際生物学賞授賞式.....	15
日本学士院所蔵貴重図書・資料のオンライン 公開について.....	12	第7回日本学術振興会育志賞授賞式.....	15
第26代日本学士院長に塩野 宏会員.....	12	会員の逝去.....	16
新幹事の選定.....	12	会員の近刊紹介.....	16
ニホニウム命名記念式典.....	12	編集後記.....	16

平成 29 年度日本学士院賞

平成 29 年 3 月 13 日開催の第 1107 回総会において、日本学士院賞 9 件 10 名（うち長谷川 昭氏には恩賜賞を重ねて授与）を決定しました。第 107 回となる授賞式は 6 月に举行される予定です。

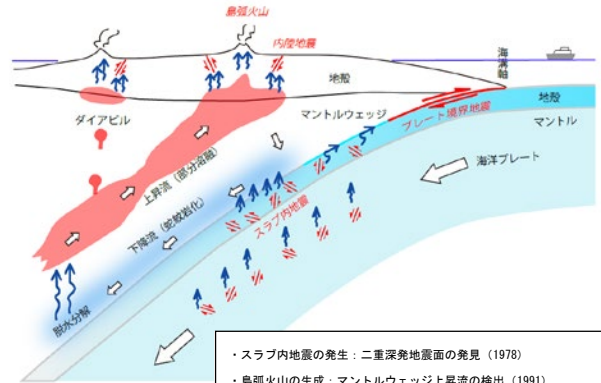
恩賜賞・日本学士院賞

「沈み込み帯のテクトニクスに関する地震学的研究」

長谷川 昭（はせがわ あきら）
東北大学名誉教授



沈み込み帯の地殻・マントル構造と地震活動を、高い解像度と精度で明らかにし、それに基づいて沈み込み帯の地震・火山現象を「沈み込みに伴って移動する水」をキーワードにして理解する途を開くなど、この分野の重要課題の解明に大きく貢献した。



- ・スラブ内地震の発生：二重深発地震面の発見（1978）
 - ・島弧火山の生成：マントルウェッジ上昇流の検出（1991）
 - ・内陸地震の発生：島弧火山と関連づけたモデル提唱（2005）
 - ・プレート境界地震の発生：物理根拠に基づく発生予測（2002）
- 全体を繋ぐキーワードは「沈み込みに伴って移動する水」

日本学士院賞

Les autels chrétiens du Sud de la Gaule (V - XII^e siècles) (『南ガリアのキリスト教祭壇：5世紀から12世紀まで』)

奈良澤 由美（ならさわ ゆみ）
城西大学現代政策学部准教授



フランス地中海沿岸の南ガリアと称される地方に残る、古代末期から中世盛期にかけて製作された 454 点の教会祭壇の悉皆調査を行い、地域的基盤に立つ祭壇類型の体系化に世界に先駆けて試み成功した。



ヴォークリューズ (Vaucluse) 県ヴナスク (Venasque) 村ノートル＝ダム聖堂の祭壇

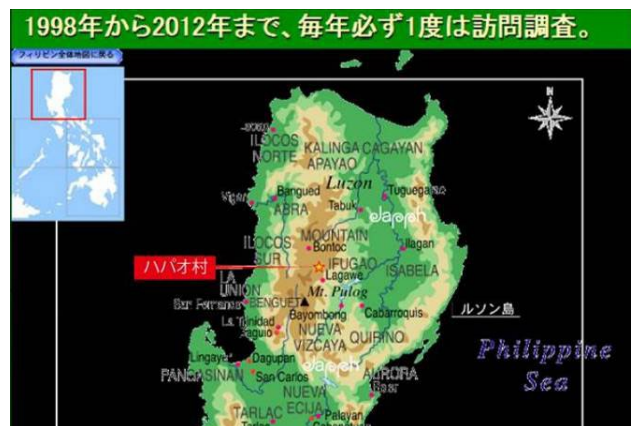
日本学士院賞

『草の根グローバリゼーション—世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』

清水 展（しみず ひろむ）
京都大学東南アジア地域研究研究所教授



外からのグローバリゼーションの波に対して、内から（村人たち）の力はいかに対峙しうるか。フィリピン・ルソン島北部の僻村に住む、先住民族イフガオのハバオ村の実態をつぶさに考察した、深さと広さを持った労作である。



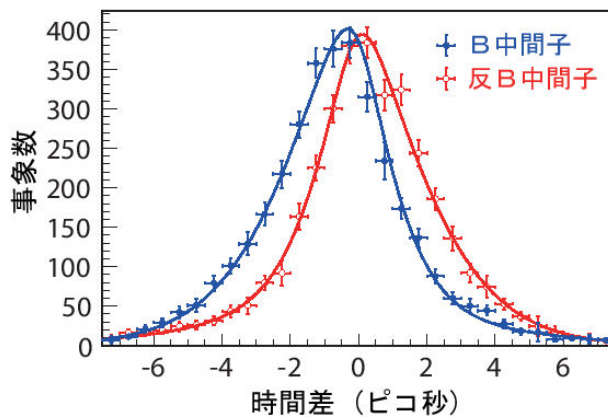
日本学士院賞

「B中間子系におけるCP対称性の破れの研究」

高崎 史彦 (たかさき ふみひこ)
高エネルギー加速器研究機構名誉教授



電子陽電子衝突型加速器Bファクトリーを用いたB中間子系の精密実験において、国際共同実験チームを率いて、粒子と反粒子の本質の違いを意味するCP対称性の破れのメカニズムを実験的に解明した。



CP対称性の破れを示す実験結果の例

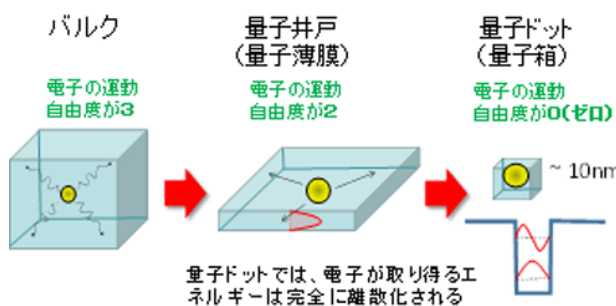
日本学士院賞

「量子ドットとその光素子に関する研究」

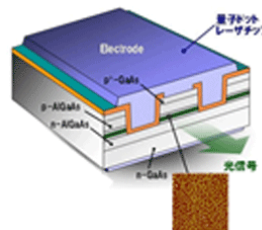
荒川 泰彦 (あらかわ やすひこ)
東京大学生産技術研究所教授



電子を3次元的に閉じ込める量子ドットについて、その研究の創始から量子ドットレーザーの実用化に至るまで、一貫して研究をリードするとともに、単一光子源や量子ナノ構造光物性研究においても卓越した業績を挙げた。



量子ドットレーザーが代表的素子



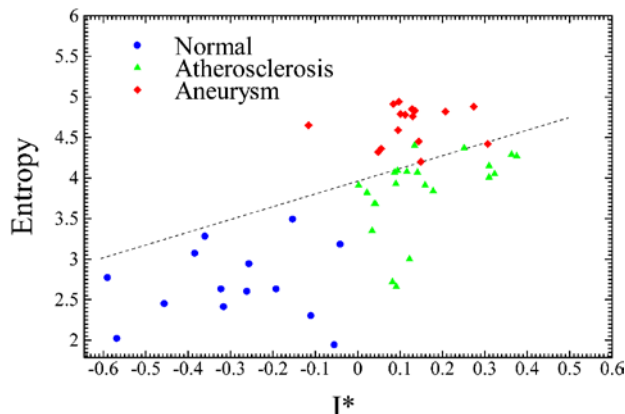
日本学士院賞

「メゾスケール力学に基づく材料の疲労および時間依存型強度学の基礎理論とその実用に関する研究」

横堀 壽光 (よこぼり としみつ)
東北大学名誉教授、帝京大学客員教授



金属物理学と巨視力学を繋ぐメゾスケール力学を独自に構築し、疲労および水素脆化、高温クリープなど時間依存型破壊寿命を定量的に予測する力学的指標を導出して、構造安全性維持に関わる材料強度学研究の実用化への道を開いた。



I*値と血管壁拍動速度軌跡のエントロピー値の2次元マップによる血管壁疾患評価法

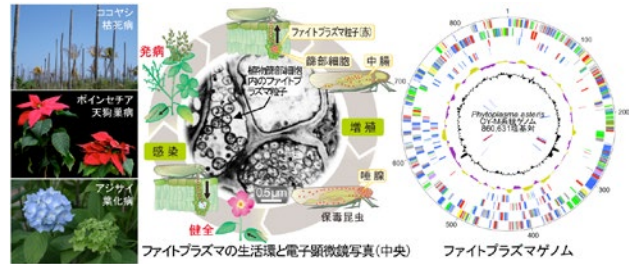
日本学士院賞

「植物病原性細菌ファイトプラズマに関する分子生物学的研究」

難波 成任 (なんば しげとう)
 東京大学大学院農学生命科学研究科教授



多様な有用植物に甚大な被害を引き起こしながら、その実体が不明であった植物病原性細菌ファイトプラズマの全ゲノムを解読し、特異な形態異常などの病徴発現や昆虫媒介の分子機構を解明した。また、高感度診断技術を開発し、ファイトプラズマ病根絶への端緒を開いた。



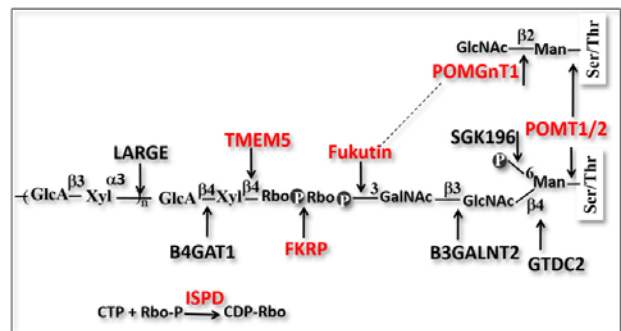
日本学士院賞

「福山型筋ジストロフィーを含めた糖鎖合成異常症の系統的な解明と新しい糖鎖の発見」(共同研究)

戸田 達史 (とだ たつし)
 神戸大学大学院医学研究科教授



遠藤 玉夫 (えんどう たまお)
 東京都健康長寿医療センター研究所副所長



日本に多い福山型筋ジストロフィーの原因遺伝子、異常発生のメカニズムを明らかにした。新しい糖鎖を発見し福山型およびその類縁疾患は系統的な糖鎖合成異常症であることを解明し、根本的な治療法開発への道を開いた。



戸田・遠藤両氏は共同して、福山型筋ジストロフィーを含めた糖鎖合成異常症の系統的な解明と新しい糖鎖の発見をした。(両氏が解明したものを赤字で示した。)
 ※ Man, マンノース; GlcNAc, N-アセチルグルコサミン; GalNAc, N-アセチルガラクトサミン; GlcA, グルクロン酸; Xyl, キシロース; Rbo, リビトール; P, リン酸

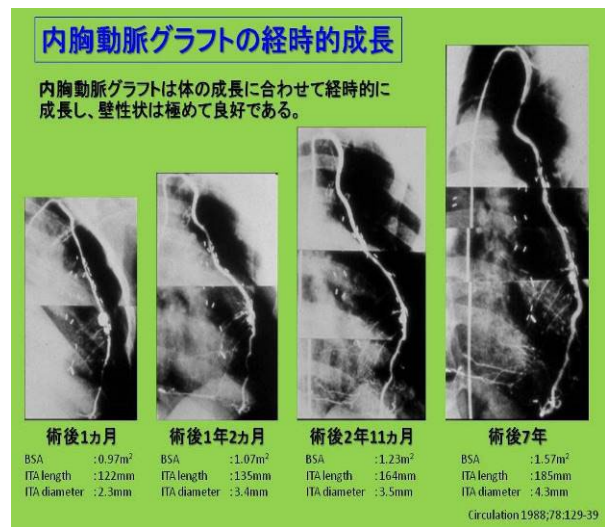
日本学士院賞

「心臓外科新領域の開発と普及：小児冠動脈再建手術」

北村 惣一郎 (きたむら そういちろう)
 国立循環器病研究センター名誉総長、循環器病研究振興財団理事長、医薬基盤・健康・栄養研究所プログラムディレクター、日本医療研究開発機構プログラムスーパーバイザー、奈良県立医科大学名誉教授、堺市立病院機構堺市立総合医療センター名誉理事長



内胸動脈を用いた「小児冠動脈再建手術」は、成長期にあり、かつ余命の長い小児に対する理想的な手術法として広く認められ、川崎病から先天性心疾患にも適応症は拡大された。世界の小児患者の救済に役立っており、新しい心臓外科の領域を確立した。



(会員寄稿)

偶然の創造性

竹内 啓 会員
(統計学・計量経済学)

近代以前の社会では、すべての現象は神の摂理、精霊の仕業、或いは「因縁」などによって生み出されるものであって、それはしばしば人間にとって理解不能であっても「必然」であり、そこには「偶然」は存在しなかった。

近代科学の世界観は、これを根本的に変えて、すべては「理解可能な」法則性に支配されるものであるとした。そこにも「偶然」の入る余地はない。決定論的世界観を確立したラプラスは、一時点での条件を正確に知れば、無限の過去から無限の未来までのすべての現象を厳密に知ることができると主張した。他方ラプラスは確率論に関する大著を著したが、彼は確率の基礎となる「不確実性」は人間の「無知」から生ずるとした。

しかし「無知」という消極的原理のみから確率論の体系を構築することは無理である。(実際ラプラスも多くのことをつけ加えている。)

19世紀を通じて、決定論的世界観の中に「偶然」をどのように位置づけるかは、大きな問題であった。そこでの大略の結論は、「偶然」と見られる予測不可能な個々の現象は、それ自体は必然からの逸脱であっても、累積すれば互いに打ち消し合って必然的なものに収束する、或いは集団として一定の形を示すようになるということであった。その数学的表現が「大数法則」或いは「中心極限定理」である。また一方、「偶然」による秩序の破壊が無限に進んで、宇宙は一様の混沌たる無秩序に向かうとする「エントロピー増大の法則」も唱えられた。

このような考え方によれば「偶然」からは新しいものは何も生まれることはない。完全に決定論的な世界観の下では、それは当然であった。

このような世界観に根本的な変化をもたらしたものが、ダーウィンの進化論であった。それは本質的に偶然的である突然変異に、外部環境による自然選択が働いて、生物が進化するというものであり、「偶然」が生物の新しい種を生み出すことになる。

しかし、進化論を受け入れた同時代の人々は、更にはダーウィン自身も、直ちにこのような考え方に達したわ

昭和8年、東京都生まれ。

東京大学経済学部経済学科卒業。東京大学経済学部助手・助教授・教授、東京大学先端科学技術研究センター教授、立命館大学政策科学部客員教授、明治学院大学教授・国際学部長・附属研究所所長、日本学術会議会員、統計委員会委員長を歴任。東京大学名誉教授、明治学院大学名誉教授。



けではなかった。「進化」を何らかの定方向的な発展、或いは「進歩」と同一視しようとする傾向は根強く残った。

当時「偶然」とは連続的な微小な変動であると考えられていた。ダーウィンも「進化」は微小な変動が積み重なって起るものと理解していた。

しかしそれだけで生物の進化を説明することは困難であった。実際ダーウィンの『種の起源』を読むと、そこでは生物の種の分化、或いは分解の過程はくわしく説明されており、よく理解できるが、そこから新しい種がどのようにして形成されるのかは、ほとんどわからないように思われる。

遺伝形質が離散的であることを確立したメンデル法則が世に知られた時、最初それは進化論と矛盾すると思われたが、それが矛盾しないのみか、その不可欠の基礎を与えることが理解されたのは、メンデル法則と自然選択の圧力を結びつけた集団遺伝学が確立してからである。

遺伝学の実体としてのDNAが発見されて、突然変異が本質的に偶然的かつ離散的であり、またDNAにはいろいろなレベルのものがあるので、ある場合には一つの遺伝子の変異が大きな変化をもたらすことがあることも明らかとなった。偶然的な突然変異はほとんどの場合破壊的な影響をもたらすが、稀に新しい秩序をもたらすことがある。それが極めて多数回の繰り返しと、環境因子による自然選択によって新しい種の形成を可能にするのである。

進化の過程は二重に偶然性に支配されている。一つは突然変異の偶然性であり、もう一つは自然選択をもたらす環境因子の変動が、生物にとっては外部的な、従って偶然的な要因によって生ずることである。その結果生物の進化という「偶然の創造性」が現れることになる。

生物の進化についてのこのような理解は、人間社会の歴史的発展の過程の理解にも示唆することがあると思う。これまで歴史の中の「偶然」については、むしろ否定的にしか扱われて来なかったと思う。しかしその積極的意味をより深く理解する必要があるのではなからうか。

第13回日本学士院学術奨励賞

平成29年1月12日開催の第1105回総会において、第13回日本学士院学術奨励賞の受賞者6名を決定しました。2月8日には秋篠宮同妃両殿下ご臨席のもと、日本学術振興会賞と同時に授賞式を挙行了しました。



「日本の労働市場における不平等に関する計量経済学的研究」

川口 大司 (かわぐち だいじ)
東京大学大学院経済学研究科教授

高度成長と人口増加の終焉、IT革命に代表される技術変化、日本型雇用慣行の変容を背景として生じている労働経済の諸問題を研究し、昨今における格差と不平等をめぐる論議に対しても重要な含意をもつ優れた研究業績をあげた。



「新規免疫細胞の発見と機能解明」

茂呂 和世 (もろ かずよ)
理化学研究所統合生命医科学研究センターチームリーダー

感染やアレルギー性疾患で重要な役割を果たす新規な細胞を世界に先駆け同定し、現在では自然リンパ球と総称される細胞群の研究分野の発展に大きく貢献した。



「人工知能社会の実現にむけた機械学習の理論と応用の研究」

杉山 将 (すぎやま まさし)
理化学研究所革新知能統合研究センター長、東京大学大学院新領域創成科学研究科教授

人工知能研究の中心にある深層学習の分野において、非定常環境下でも有効に働く適応学習理論、確率密度比に基づく機械学習という新しい分野を開拓し、実用への道を開いた。これらの業績は世界的に高く評価されている。



「生体内細胞初期化技術の開発とそのがん細胞運命制御への応用」

山田 泰広 (やまだ やすひろ)
京都大学iPS細胞研究所教授

iPS細胞技術を応用して、がんがエピゲノムの制御異常により発生しうることを示した。がんは遺伝子変異によって発生するという概念に一石を投じ、がん細胞の運命転換による新規治療戦略の可能性を示した。



「カシュブ語を中心とするスラヴ諸語の形態統語構造ならびにその通時的・地理的变化に関する類型論的研究」

野町 素己 (のまち もとき)
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授

スラヴ語の消滅危機言語であるカシュブ語とバナト・ブルガリア語について、形態統語論、言語類型論、言語接触論や社会言語学などの側面から、共時的・通時的に精緻なフィールドワークを行い、国際的に高い評価を得た。



「大規模数値シミュレーションに基づく初期宇宙での構造形成の研究」

吉田 直紀 (よしだ なおき)
東京大学大学院理学系研究科教授

ビッグバン直後に宇宙を満たす水素・ヘリウムのガスが密度の揺らぎから最初の星々と星間ガスを生みだすプロセスの詳細なコンピューター・シミュレーションを行い、第一世代星は太陽の数十倍から百倍の質量を持つことを初めて明らかにした。

<学術奨励賞受賞者寄稿>

「スラヴ語世界の多様性に魅せられて」

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授 野町 素己

東欧・旧ソ連で広く話されるスラヴ諸語は、互いに言語構造が似ていることで知られています。このなかで最も馴染があるのはロシア語です。私は高校生の時にソ連史に関心があり、大学入学時にロシア語を第二外国語として選択しました。しかしロシア語を勉強し始めると、その歴史変化や方言差に興味を湧き、専攻を言語学にしました。修士課程に入ると、先祖を同じくする他のスラヴ諸語に関心を持ち、ロシア語と南スラヴ諸語の文法対照研究に取り組みました。この時に会ったのが旧ユーゴスラヴィアの言語学者ミルカ・イヴィッチ教授の研究でした。教授は主要なスラヴ諸語やヨーロッパ諸言語を自由に操られ、また旧ソ連・東欧に加え、西欧・米国の言語学の様々な潮流や分析理論に通じ、それを応用してセルビア語や他のスラヴ諸語の通時的・共時的諸問題を見つけ、鋭い分析を行う著作を多く書きました。素朴な疑問の背景にある問題の本質を見抜き、圧倒的な知識を持って、一見似たり寄ったりのスラヴ諸語の文法構造の問題を、論理的に解決するスタイルは魅力的でした。

そのスタイルを目指しつつ、私は方言や規範が弱い小言語の研究にも活かせないかとも考えました。ワルシャワでスラヴ方言学の泰斗ヤヌシュ・シャトコフスキ教授の講義を聴講するうちにスラヴ方言研究は分析・記述手法が比較的画一的で、言語変化の仕組みや原因に無関心に思えたからです。そこで注目したのが言語接触により文法構造が独特に変化したポーランドの小言語カシュブ語でした。この言語の方言学的記述で扱われない問題の解決には、関係する諸言語との比較や詳細な現地調査が必要です。通時の変化を知るには、もし存在するのであれば、様々な古文書の分析が求められます。また変化の遠因となる言語使用状況の歴史も重要です。このように様々なスラヴ諸語を知り、対象への多角的な分析を行うことで、1言語研究の枠を越える成果に結びついてきました。今後もスラヴ語研究への貢献を目指しつつ、かつその枠に囚われない、言語研究一般に資する成果を出せるように心がけたいと思います。

「40%の偶然と10%の努力、50%の人の支えが発見を生み出す」

理化学研究所統合生命医科学研究センターチームリーダー 茂呂 和世

「学問」という言葉を辞書でひくと、知識を学び習うこと、とある。「研究」という言葉をひくと、物事を詳しく調べて新しい事実や真理を明らかにすること、とある。我々研究者は学問に身を投じているわけだが、学問はあくまでも受け身であり新しい発見を生み出さない。研究すること、つまり教科書に書いていない新しい疑問を自ら見つけ、論理立てて検証することで真理が明らかになり発見と呼ばれるようになる。

発見の種となる新しい疑問はどのようにしてもたらされるのだろうか？ 乏しい経験から察するに、多くの場合は意図しない偶然によることが多いのではないかと思う。私の場合はまさに偶然で、学生の頃、別の研究目的で扱っていた脂肪組織の中に教科書に書いていない謎のリンパ球を見つけた。当時、それがはたして面白い細胞なのか、研究対象とすべき細胞なのか分からなかった。他にやるべき研究テーマが決まっていなかったその細胞について解析し始めたというのが正直なところである。よく分からないながら学会などで発表すると、色々な人が意

見をくださった。研究室の仲間も新しいデータが出る度にたくさんの提案をしてくれた。膨大な時間と、膨大な資金と、膨大なデータが大勢の人の協力のもと出たが、今思うとその中で本当に結果に結びついた実験は、ほんの一部に過ぎないように思う。しかしながらこの徒労とも思われる時間と費用と努力なくして新しい発見には結びつかないことも事実だと実感した。

新しく見つけた細胞はナチュラルヘルパー細胞と名付けられ、寄生虫感染に対する防御や、アレルギー性疾患の発症に関わることが明らかになり世界中に注目されるようになった。今後、この細胞が様々なアレルギー性疾患の治療ターゲットとなることが期待されている。偶然は意志とは無関係であり、努力は研究者にとって当然のことである。疑問を発見へとつなげるために最も重要なファクターは、小さな発見の種が大輪の花を咲かせるまでに、光と水をくれたたくさんの人の支えなのかもしれない。

日本学士院学術奨励賞・日本学術振興会賞授賞式（平成29年2月8日）



賞状及び賞牌を授与される受賞者（野町素己氏）



受賞者代表として挨拶する茂呂和世氏



選考経過報告を行う苧阪直行委員長



記念茶会で受賞者のご懇談になる秋篠宮同妃両殿下

新会員選定

平成28年12月12日開催の第1104回総会において、日本学士院法第3条に基づき、興膳 宏氏を新たに日本学士院会員として選定しました。



興膳 宏（こうぜん ひろし）

第1部第1分科

専門分野：中国文学

現職：京都大学名誉教授、六朝学術学会会長

りゅうきょう ぶんしんちやうりゅう しやうこう しひん
劉勰の『文心雕龍』、鍾嶸の『詩品』

の二つの作品を軸として、六朝の文学理論について系統的に研究し、これに基づいて、王羲之、陶淵明など、多数の六朝詩人の詩を創作と理論の双方から総合的に分析し、研究に新生面を開いた。

ホームページでは、より詳細な選考理由を紹介しています。（<http://www.japan-acad.go.jp/>）

<会員はこうして選ばれます>

- 1月～2月 学士院会員、日本学術会議会員、学会・大学等学術機関からの会員推薦受付
- 3月 会員選考開始
- 4月～11月 第1部・第2部の各部・分科で選考
- 12月 新会員選定



会員選定状授与式の様子
（平成28年12月19日）

『学問の山なみ』から—歴史をつくった会員—

130年を超える学士院の歴史の中で、500名以上の会員が選定されました。このコーナーでは、物故会員追悼の辞を集めた『学問の山なみ』から毎回2名を紹介します。

長井長義 ながい ながよし

弘化2(1845)年—昭和4(1929)年
明治39(1906)年 帝国学士院会員選定



徳島県徳島市の生まれ。父は阿波藩主蜂須賀氏の典医であった。15歳で蘭学の藩校に通い、慶応2(1866)年、22歳の時に医学を学ぶため長崎留学を命ぜられ、ボードウィン、マンズフェルト、写真家の上野彦馬に化学や医学を学んだ。明治

元(1868)年、大学東校(東京大学医学部の前身)に入学。第1回海外留学生としてプロイセンに派遣を命ぜられ、明治5(1872)年ベルリン大学に入学。コニフェリン類の研究などをドイツ化学会で発表した。明治12(1879)年には有機化学の分野で有名なホフマン教授の助手となり、多くの研究業績を挙げた。明治14(1881)年には学位を与えられる。明治17(1884)年に求めら

れて帰国し、東京大学教授となり、理学部で化学を、医学部で薬化学を担当した他、内務省御用掛、衛生局東京試験所長、大日本製薬会社製薬長なども務めた。明治18(1885)年には、常緑低木で漢方としても用いられていた麻黄からエフェドリンを単離・抽出することに成功し、その後も化学的構造の研究、合成、関連化合物の発見などを行った。エフェドリンは、気管支拡張や麻酔など、現在もさまざまな医療に使われている。この後も長井は、多くの生薬の有効成分を発見している。明治21(1888)年には初の理学博士、明治32(1899)年には、これも初となる薬学博士の学位が与えられた。

長井は、30年にわたり薬局方調査会長として薬品の標準規格を編成したほか、日本で最初の薬学専門学校である富山県立薬学専門学校(現在の富山大学薬学部)や徳島高等工業学校応用化学科製薬化学部(現在の徳島大学薬学部)などの設立に貢献した。また、東京化学会(日本化学会の前身)会長や、東京薬学会(日本薬学会の前身)の初代会頭を務めた。夫人がドイツ人ということもあり、日独親善や女性教育にも力を尽くした。

高峰讓吉 たかみね じょうきち

安政元(1854)年—大正11(1922)年
大正2(1913)年 帝国学士院会員選定



富山県高岡市の生まれ。父は加賀藩の典医で、石川県金沢市で育った。11歳の時に長崎に留学し、オランダ語・英語を学んだ。引き続き、京都の兵学校や大阪の適塾で医学を、大阪の舎密学校で化学を学び、上京して明治12(1879)年、工部大学

校の第1回卒業生となった。翌年イギリス・グラスゴー大学に留学し、3年後帰国して農商務省に就職し、明治19(1886)年に特許局長となった。明治17(1884)年、出張したニューオリンズの万国工業博覧会で肥料製造用のリン鉱石に注目し、その国産化を目指して東京人造肥料会社を設立した。明治21(1888)年には官職を辞しその経営に専念した。明治23(1890)年には、清酒の腐敗を防ぐ麹菌の改良で特許を取り、その技術をウイス

キー醸造に生かすための共同事業の提案があり、同年に米国に移住した。小麦のフスマから元麴を作る新しい醸造法は、業者の猛烈な反対を受けたこともあり、成功しなかったが、その研究の過程で、強力な消化酵素ジアスターゼを作り出す菌を発見し、量産化に成功してタカジアスターゼの商品名で消化薬を販売し、商業的に成功を得た。また、明治33(1900)年には長井長義の薫陶を受けた上中啓三と協力して牛の副腎からアドレナリンの結晶を抽出することに成功した。これは、世界で初めてのホルモン抽出の例である。この業績に対し、明治45(1912)年、第1回の帝国学士院賞が授与された。アドレナリンは現在も、止血や血圧上昇の重要な薬として使われている。

高峰は科学の発展にも意を払い、帝国学士院に多額の寄附を行ったほか、国民科学研究所の必要性を提唱し、4年後、理化学研究所が設立された。また、米国人女性と結婚したこともあり日米親善にも尽くし、ニューヨークに日本倶楽部を設立して会長となり、日本風の別荘を設け、日米の要人を招いた。また、ワシントンDCのポトマック河畔に桜並木を実現することにも関わった。

(会員寄稿)

日本学士院と日本の がん研究・診療

杉村 隆 会員
(生化学・腫瘍学)

がんの本態研究とがんの診療は、この数十年間に格段に進歩した。今やがん患者さんの社会的立場の研究もある。がんにならないための予防研究も進展している。

日本のがん研究の世界のがん研究に対する寄与は、日本学士院恩賜賞(恩)、日本学士院賞(賞)、日本学士院会員(会)のリストを見ると実感される。ロンドンの煙突掃除人の陰嚢にタールが沈着し、がん発生の原因となるのではと推測された(1775年)。東京大学の病理学の山極勝三郎博士(賞:1919年、会:1919~30年)、市川厚一博士(賞:1919年)は、ウサギの耳にコールターを繰り返し塗布することにより、世界で初めて人工がん発生に成功した。

有効物質を純粋に分離したのは欧州のグループで、当時日本では異分野間の共同研究は難しかったらしい。有効成分はベンツピレン誘導体のようなアロマティックハイドロカーボン(芳香族炭化水素)であった。

世界ではじめて動物の内臓にがんを発生させたのは、佐々木隆興博士(恩:1924年および1936年、会:1939~66年)と吉田富三博士(恩:1936年および1953年、会:1965~73年)である。佐々木博士が自ら結晶純化されたアゾ色素オルトアミノアゾトルオールを餌に混ぜ、ラットに与え、肝がん発生に成功した。佐々木博士の1924年の恩賜賞受賞は、細菌のアミノ酸代謝の研究で、1936年受賞のアゾ色素の発がん性の研究は2回目の栄誉であった。その後、生化学者はアゾ色素の代謝産物が蛋白質、核酸に共有結合をしていることを明らかにしつつあった。

その後、長崎大学教授になられた吉田富三博士は、亜硫酸とアゾ色素の同時投与で1匹のラットに、腹水がたまり、単細胞の悪性細胞が浮遊して増殖している個体を発見した。その腹水がんを他のネズミの腹腔中に注射すると、再び腹水腫が発生した。細胞の形態学的研究により、学会で肉腫細胞とされた。世界中で使用され、1953年に2度目の日本学士院恩賜賞を受けられた。

日本学士院の歴史の中で、同一人物が日本学士院恩賜賞を2度受賞したのは、佐々木博士と吉田博士だけである。吉田博士は東北大学教授、東京大学教授、佐々木研究所長、癌研究所長等を務められた。1973年がんで御逝去になった。

大正15年、東京都生まれ。東京大学医学部医学科卒業。東京大学医学部放射線医学教室助手、癌研究会癌研究所所員、国立がんセンター研究所生化学部長・研究所長・総長、東邦大学学長、日本学士院長を歴任。恩賜賞・日本学士院賞、文化勲章、日本国際賞、勲一等瑞宝章を受賞。国立がんセンター名誉総長・東邦大学名誉学長。



個人的なことを記すのをお許しいただくと、私は1949年に東京大学を卒業し、放射線医学教室、生化学教室を経て、当時中原和郎博士(賞:1965年、会:1974~76年)が所長であった大塚の癌研究所に職を得た。採用に際して、中原博士の「何を研究してもいい。しかし外国の研究の真似だけはしないように」との言葉が生涯忘れられない。

癌研での私の研究のひとつは4・ニトロキノリン・1・オキシド(4NQO)であった。東京大学薬学部の落合英二博士(学:1944年、会:1965~74年)が戦時中、抗マラリア剤創造の研究途次で合成されたものという。中原博士が4NQOの発がん性を証明され、私も少々のお手伝いをした。1957年から米国ベセスダにある米国国立癌研究所(NCI)、ウェスタンリザーブ大学に3年程いて、視野を広め、帰国した。間もなく国立がんセンターが発足した。総長は田宮猛雄博士(会:1963~63年)、病院長は久留勝博士(賞:1949年)で、研究所長は中原和郎博士であった。旧海軍病院の古い建物を利用していたが、研究所は自由な雰囲気であった。私は在米時代から興味があった嫌氣的酵母の好氣的適応に伴うミトコンドリア、コエンザイムQ₆合成等も研究した。好氣的条件でアクリフラビンによるミトコンドリアのない呼吸欠損菌(RD)等も研究した。温度感受性のRDの研究も面白かった。一方、4NQOの研究も続け、4NQOの代謝産物によるDNA修復阻害等も見つけた。4NQOおよびその代謝産物のDNA・蛋白質上の結合も研究をした。

NCI時代からの友人カリフォルニア大学のブルース・エームス博士が、肝臓の代謝系、発がん物質、検出用のサルモネラ菌を使って、物質の変異原性を検出する方法を発表し、世界中で使われるようになった。当時、東京大学医科学研究所の助教授松島泰次郎博士がエームス試験改善として三者を同時に培養する方法を報告した。エームスの原法では変異原陰性となるベンツピレン、アゾ色素を陽性に検出できる。100種以上のがん原物質が変異原物質であると、エームス博士とほとんど同時に結論づけた。

その頃、遺伝学者が変異原物質として使っていたN-メチル-N'-ニトロ-N-ニトロソグアニジン(MNNG)をラットに皮下注射すると肉腫が発生し、ラッ

トに MNNG を含む溶液を飲料水として与えると、胃がんが発生することを発見した。雑誌 Nature に投稿した。二つの報文は、図を含めて 1 ページの論文であった。私自身が考えるより、世界の注目をあびたらしい。この頃、肝がん細胞の代謝研究中にポリ (ADP) リボースを発見した。

煙草の煙はがん原物質 (変異原物質) を含んでいる。魚を焼いて、煙と焦げた部分の変異原性を調べた。新しく十種ぐらいの新規のヘテロサイクリックアミンに変異原性をみとめた。数種類はがん原性であることをマウスの経口投与で証明した。何分、日常摂取しているもの話なので世界の注目をあび、外国で講演する機会が多くなった。後年パンを作る時、アクリルアミド (発がん性陽性) が微量生成されることがスウェーデンで報告された。生活に関連しているので、規制できず困っていた。幸い量が少ないので、安全であることと政・学界が取り扱った。カビの生産するアフラトキシンも、食物中に微量に存在するものは、同様である。肺がん、肝がん、子宮頸部がんは、それぞれ喫煙、肝炎ウイルス、子宮頸部がんウイルスが大きな原因となっている。しかし、活性酸素、放射線、極微量だが多種の発がん要因に人間の細胞のすべては暴露されている。一般に微量だが種類の多い変異要因に被曝している。がんは複数の DNA の変化により発生する。その遺伝子の組み合わせは一通りではない。がんになる遺伝子変化の組み合わせの数は多い。同じ胃がんでも人により、胃がんの塊の中の部位により組み合わせの変化が起こりやすい。ゲノム不安定性はがんの特長である。

私の研究成果を評価してくれる先輩があり、日本学士院と関係するようになった (恩: 1976 年、会: 1982 年~現在)。1982 年に、米国国立科学アカデミーの外国人会員に選ばれた。停年後、蝶の蛹からピエリシン・ペプチドを見つけた。超微量でがん細胞を殺す。蝶の変態とがん細胞の関連で興味深い。今でも実験したい夢を時々見る。

がん発生では、ウイルス研究が重要である。日本住血吸虫の研究者藤浪鑑博士 (賞: 1918 年、会: 1929~34 年) は日本のニワトリの白血病細胞のウイルス性を研究した。ニワトリの肉腫細胞のある系が温度感受性であると、豊島久真男博士 (賞: 1987 年、会: 1993 年~現在) が発見した。がん形質表現に特別な蛋白質があること、すなわちその変異蛋白質を合成する遺伝子があると主張した。世界的にがん遺伝子 (oncogene) が数多く発見され、分子生物学的機構に迫るようになった。日本のがんウイルス研究で特筆されるべき成人 T 細胞白血病 ATL のウイルス病因に関しては、日沼頼夫博士 (恩: 1989 年) が受賞している。ATL 研究には、すぐれた業績を挙

げた研究者が多い。細胞融合と生物学で、岡田善雄博士 (恩: 1980 年、会: 1993~2008 年) の研究は、世界で高く評価されている。細胞融合に頻用されるセンダイ・ウイルスを開発された東北大学、石田名香雄博士 (賞: 1987 年) も受賞している。

思い出すと、北海道大学の牧野佐二郎博士 (賞: 1958 年、会: 1973~89 年) が吉田博士と、吉田肉腫細胞の染色体の形、数の異常のひどいものは、分裂増殖するとは思えず、一見正常に近い染色体構成のものが分裂するのだと討論された。基礎的研究で重要な tRNA の多数の修飾塩基を解明した西村暹博士 (恩: 1988 年)、DNA の一塩基変化を検出する方法の発見者関谷剛男博士 (賞: 2002 年、会: 2005 年~現在)、細胞増殖因子研究の宮園浩平博士 (賞: 2011 年) に代表される研究に日本学士院は深く関係している。

日本の抗がん剤の研究も盛んであった。東大の石館守三博士 (賞: 1943 年) はサルファマスタートの抗白血病性に基づいてナイトロミンを合成した。予防衛生研究所の梅澤濱夫博士 (賞: 1962 年、会: 1969~86 年) は抗生物質ブレオマイシンを、北里研究所の秦藤樹博士 (賞: 1990 年) と大村智博士 (賞: 1990 年、会: 2001 年~現在) は膨大な数の抗生物質研究により、抗がん性マイトマイシンを発見した。今でも混合療法の 1 つとして使われている。2015 年の大村博士のノーベル賞受賞は、アフリカの寄生虫に効く抗生物質エバメクチンの発見による。また、愛知県がんセンター総長を務めた高橋信次博士 (賞: 1977 年、会: 1981~85 年) は、独自の立体放射線照射法で有名であった。

がんの免疫学の発展は日本の特長であり、日本学士院第 7 分科会 (医学・薬学・歯学) の現会員 17 名のうち、石坂公成博士 (恩: 1974 年、会: 1997 年~現在)、岸本忠三博士 (恩: 1992 年、会: 1995 年~現在)、本庶佑博士 (恩: 1996 年、会: 2005 年~現在)、審良静男博士 (恩: 2007 年、会: 2014 年~現在) の 4 名が関係している。本庶博士の発見による PD1 抗体は、がん免疫研究を目的としない免疫の基礎研究に生まれた。楽しく研究をすることが大切なことを示している。なお、サイトカイン研究の東大の谷口維紹博士 (賞: 2000 年)、糖脂質研究の理研の谷口直之博士 (賞: 2011 年) もがん免疫研究に期待される。

がんの臨床研究としては、肝がん病理学の森亘博士 (会: 1995~2012 年)、織田敏次博士 (会: 1994~2012 年)、市川篤二博士 (会: 1977~93 年)、黒川利雄博士 (会: 1965~88 年) 等がおられる。基礎研究者でもあり内科医であった山村雄一博士 (賞: 1985 年、会: 1986~90 年) は、パイオニアであった。外科系のすぐれた学者も重視することが望まれる。

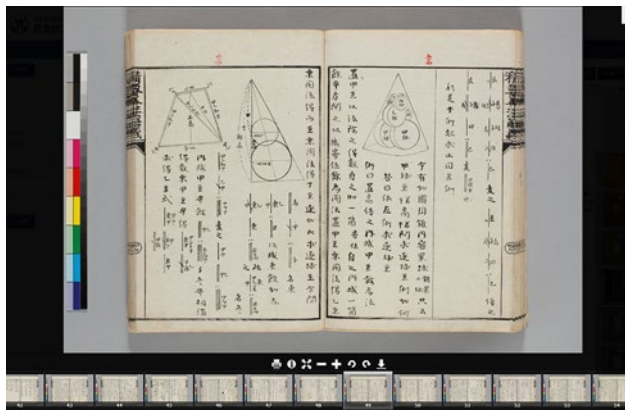
日本学士院は Proceedings of the Japan Academy を毎月（7、8月を除く）発刊している。論文提出から発刊までの時間が短い。投稿論文は、日本学士院内外の2名のレフェリーの査読を受ける。研究領域の近い会員が担当して第二部会で紹介される。私も黒川博士や梅澤博士を通じて、発見の時点が評価の問題になるような場合に利用した。

がんの本態は複数のがん遺伝子、がん抑制遺伝子の変異の極めて複雑な組み合わせで起こるらしい。しばらくは基礎的なゲノム生物学、医学の研究ががん研究の主流を形成しよう。日本学士院では、がんの本態解明には基礎生物学の貢献が大切と理解している。2012年ノーベル賞受賞の山中伸弥博士（恩：2010年、会：2013年～現在）の幹細胞、2016年ノーベル賞受賞の大隅良典博士（学：2006年）、同じく2002年ノーベル賞受賞者の田中耕一博士（会：2006年～現在）に代表されるような様々な基礎生物化学の分野が、がんの実態解明に寄与する。

がん疫学とか、がん予防とか、多数の関係者が長い時間をかけ、正確な統計に基づく研究をすることも大切である。社会学的がん研究により、がん発生と予防、早期発見と治療の研究が進む。また患者さんに直接関わる介護等の対応のあり方の研究も、疫学を含む社会科学的な研究から、日本学士院で評価される。日本学士院は、国の内外のがん克服への道を正確に把握している。

日本学士院所蔵貴重図書・資料のオンライン公開について

日本学士院には、2万点に及ぶ和算に関する図書を含む貴重図書・資料を所蔵しています。この度、重要文化財となっている『藤田貞資関係資料』をオンライン公開 (<http://www.japan-acad.go.jp/shiryo/>) いたしました。今後、公開する資料を増やしていく予定ですので、ご利用いただけますと幸いです。



資料の閲覧画面

第26代日本学士院長に 塩野 宏会員

平成29年10月12日開催の第1102回総会において、新たに塩野宏会員を院長に選定しました。任期は3年です。塩野会員は、平成11年に会員に選定され、第1部第2分科に所属。専門分野は行政法で、東京大学法学部教授・法学部長、成蹊大学法学部教授、東亜大学大学院総合学術研究科教授を歴任。平成25年11月より本院幹事を務めていました。



塩野会員は、日本の行政法研究の新たな発展のための基礎理論を固めたこと、広範囲にわたる行政法の個別領域について行政と社会の実体に関する鋭い現実感覚に裏打ちされたすぐれた業績を挙げたこと、これらの研究を総合して体系化された行政法解釈論を構築して学界と実務に大きな影響を与えたことなど、わが国の行政法学を今日の水準に高める推進力の役割を果たしています。

新幹事の選定

塩野 宏幹事の院長選定に伴い、平成28年12月12日に幹事の補欠選挙を行い、古在由秀会員（天文学）が選定されました。



ニホニウム命名記念式典

平成29年3月14日、理化学研究所主催（日本学士院ほか後援）による式典が本院を会場として挙行されました。本式典は、理化学研究所のグループが原子番号113番の新元素を合成・発見したことに対し、アジアの国で初めて命名権が与えられ、ニホニウムと決定したことを記念して開催されたものです。

式典は、皇太子殿下の御臨席のもと、ナタリア・タラソバ国際純正・応用化学連合（IUPAC）会長の命名宣言の他、皇太子殿下のおことばや各来賓からの祝辞、森田浩介グループディレクターによるニホニウム命名経緯説明などが行われました。なお、森田氏には、平成28年、日本学士院賞が授与されています。

講演会レポート

本院主催により、以下の講演会を開催しました。

1 第65回公開講演会

開催日 平成28年10月22日(土)

会場 日本学士院会館

奥田昌道会員が「責任能力のない高齢者による加害事故と家族の責任」、長尾真会員が「電子図書館とその将来」と題して講演を行いました。

奥田会員は、重度の認知症の高齢者が第三者に損害を与えた事例とその判決をもとに、責任能力の捉え方や被害者救済といった課題について、丁寧に説明しました。また、長尾会員は、国内外の図書館におけるデジタル化の取組みを解説しながら、電子図書館が現代社会に果たす役割や将来性について、わかりやすく説明しました。聴講者は熱心に聞き入り、質疑応答も活発に行われました。聴講者からは、奥田会員の講演に対し「自分の問題として、考えさせられる講演であった。」、長尾会員の講演に対し「将来デジタル化においていかれるのではないかという不安に襲われることがあったが、講演を聴いて楽しみに変わった。」などの意見が寄せられました。



奥田昌道会員

2 学びのススメシリーズ講演会

「徳川吉宗に学ぶ—日本の宝を守った将軍」

開催日 平成28年12月17日(土)

会場 日本学士院会館

本講演会は、将来を担う中学生・高校生に、学問への憧憬を抱かせることを目的として計画され、今回は第9回開催となりました。

講師の田代和生会員は、享保の改革で有名な第8代将軍徳川吉宗が、薬用人参輸入の見返りに流出していた銀貨を守るため、朝鮮人参の人工栽培に取り組んで、試行錯誤の後に成功した知られざる歴史をわかりやすく説明しました。聴講者からは、「歴史好きでも、ほとんど知らない話で、とても興味深い話だった。また、丁銀にさわられて嬉しかった。」「吉宗といえば、「享保の改革」を行った人物というのが、私の今までのイメージであったが、飢饉政策だけではない吉宗の政策のあり方、また吉宗自身の魅力がよく分かった。」「古文書を丹念によみこまれ、物語のように展開されていく研究の姿勢に感服した。」などの意見が寄せられました。講演後は、江戸時代の銀貨を参加者が実際に手に取ることのできるコーナーが設けられ、多くの聴講者が参加しました。



講演を行う田代和生会員



長尾真会員



講演後、江戸時代の銀貨に触れる中高生と田代会員

第 66 回公開講演会のお知らせ

平成 29 年 5 月 20 日（土）、第 66 回公開講演会を徳島大学長井記念ホール（徳島市）において開催します。

本席 佑会員は「免疫力でがんを治す」、野中郁次郎会員は「知識創造によるソーシャル・イノベーションの実践」というタイトルでそれぞれ講演を行います。

共催：徳島大学 後援：徳島新聞社

《開催日時》

平成 29 年 5 月 20 日（土）午後 1 時～4 時 10 分

《会場》

徳島大学長井記念ホール

〒 770-8505 徳島市庄町 1 丁目 7 8 番地の 1

入場無料

必要事項を記入の上、下記まで事前にお申込みください。

定員 280 名、先着順。

＜申込方法＞

日本学士院ホームページから、または e-mail、FAX、往復はがきによる

＜必要事項＞

氏名（ふりがな）、住所、電話番号等連絡先

日本学士院公開講演会係

（〒 110-0007 東京都台東区上野公園 7-32）

TEL: 03-3822-2101 FAX: 03-3822-2105

e-mail: kouenkai@japan-acad.go.jp

http://www.japan-acad.go.jp/

免疫力でがんを治す

本 席 佑

PD-1 は、1992 年に京大医学部の石田らによる偶然に発見された分子である。その後の 1998 年までの遺伝子欠失マウスを使った研究で免疫応答にブレーキをかける受容体であることが証明された。2000 年には京大と Genetic Institute との共同研究で PD-1 のリガンドも発見された。2002 年岩井らはマウスモデルで PD-1 とリガンドの会合を阻害し、免疫活性を増強することによって抗がん能力が著しく高まることを発見した。この知見

をもとにヒト型 PD-1 抗体を作り、がん研究に応用することを提案し、2006 年ヒト型 PD-1 抗体の作製が行われた。その後治験が進み PD-1 抗体はメラノーマの治療薬として 2014 年 6 月に PMDA によって承認された。現在、世界中では 200 件近くの PD-1 抗体による各種がん腫治療への治験が進行中であり、有効性が確認されつつある。今後は日本の企業が次のアカデミア由来のシーズ誕生にどのように貢献するか注目される。

知識創造によるソーシャル・イノベーションの実践

野 中 郁次郎

現代社会は、ローカルとグローバルな関係が、複雑に入り組み大きな流れをつくり、絶えず動いている。このような背景のなか表面化する社会的課題を解決するために、社会の仕組みを変える新たな知識と価値をつくるソーシャル・イノベーションの動きが活発化している。知識創造理論の観点から見れば、ソーシャル・イノベーションとは、地域の組織や人々が新たな関係性をつくり、その地域特有の歴史や伝統、文化などの暗黙知や有形無形の資産を新たな形や手法で活用して、新しい知識と社会的価値を創造し、社会を変革する活動である。本講演では、「知」から社会的価値を創出したコミュニティ・企業・NPO の実践事例をもとに、知識経営の観点から地域社会の活性化を考える。

本席 佑会員が京都賞受賞

平成 28 年 11 月 10 日、第 7 分科の本席 佑会員（医化学・分子免疫学専攻）が、稲森財団より京都賞（基礎科学部門）を受賞しました。受賞理由は、「抗体の機能性獲得機構の解明ならびに免疫細胞制御分子の発見と医療への展開」です。

岸本忠三会員がキング・ファイサル国際賞受賞

平成 29 年 1 月、第 7 分科の岸本忠三会員（免疫学専攻）が、サウジアラビア王国のキング・ファイサル財団よりキング・ファイサル国際賞（医学部門）を 4 月に受賞することが決定しました。受賞理由は、「自己免疫疾患の生物学的治療」です。

会館施設の利用案内

建築家谷口吉郎氏の設計による現在の日本学士院会館は、日本を代表する碩学の府にふさわしい荘厳かつ気品と機能性を備えた建物となっています。館内には、議場のほか大小6つの会議室等があります。

本施設は、学術の発達に寄与するための会合に利用することが可能です。ご利用になりたい方は、庶務係までお問い合わせください。



日本学士院会館



玄関ロビー



総会議場

建築家 谷口吉郎

明治37(1904)年－昭和54(1979)年。石川県金沢市出身の昭和期の建築家、庭園研究者である。東京帝国大学建築学科卒業後、東京工業大学で講師、助教授を経て、教授を務め、昭和48(1973)年には文化勲章を受章している。

主な作品として、慶應義塾大学日吉寄宿舍、同大学第3校舎(4号館)・大学学生ホール、同大学三田キャンパス第2研究室(新萬來舎)、秩父セメント第2工場、帝国劇場(ロビー・客席)、出光美術館、東京国立博物館東洋館、東京国立近代美術館、ホテルオークラ東京(メインロビー)、日本学士院会館など数多く挙げられる。

第32回国際生物学賞授賞式

平成28年11月21日、国際生物学賞委員会((独)日本学術振興会に設置、委員長 杉村 隆前院長)主催による授賞式が本院を会場として挙行されました。

この賞は、昭和天皇のご在位60年と長年にわたる生物学のご研究を記念するとともに、本賞の発展に寄与されている今上天皇の長年にわたる魚類分類学(ハゼ類)のご研究を併せて記念し、生物学の奨励を図るものです。

今回の授賞分野は多様性の生物学で、受賞者は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校卓越教授のステイブ・フィリップ・ハッベル博士です。

授賞式は、天皇皇后両陛下のご臨席を賜り行われました。授賞式後両陛下ご臨席のもと、受賞者を囲んで地階食堂で記念茶会が催されました。

第7回日本学術振興会育志賞授賞式

平成29年3月8日、(独)日本学術振興会主催による日本学術振興会育志賞授賞式が本院を会場として挙行されました。

同賞は、天皇陛下のご即位20年に当たり、社会的に厳しい経済環境の中で、勉学や研究に励んでいる若手研究者を支援・奨励するための事業の資として賜った御下賜金を元に、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰することを目的として、創設されました。

授賞式は、秋篠宮同妃両殿下のご臨席を賜り行われました。授賞式後両殿下ご臨席のもと、受賞者を囲んで地階食堂で記念茶会が催されました。

会員の逝去

平成 28 年 10 月以降、次の方々が逝去されました。

貝塚啓明 会員 (第 3 分科、財政学・金融論専攻)

平成 28 年 10 月 25 日 享年 82 歳

富澤純一 会員 (第 4 分科、分子生物学専攻)

平成 29 年 1 月 26 日 享年 92 歳

中野貞一郎 会員 (第 2 分科、民事手続法専攻)

平成 29 年 2 月 20 日 享年 91 歳

会員の近刊紹介

- ・久保田 淳監修『和歌文学大系 37 続後撰和歌集』明治書院、平成 29 年 1 月
- ・佐藤彰一『贖罪のヨーロッパ 中世修道院の祈りと書物』中公新書、平成 28 年 11 月
- ・東野治之『史料学遍歴』雄山閣、平成 29 年 1 月
- ・樋口陽一『六訂 憲法入門』勁草書房、平成 29 年 2 月
- ・三谷太一郎『日本の近代とは何であったか 問題史的考察』岩波新書、平成 29 年 3 月
- ・菅野和夫『労働法 第十一版補正版 (法律学講座双書)』弘文堂、平成 29 年 2 月
- ・藤田宙靖 (藤田紀子氏と共著)『続 広瀬川を望む丘にて』有斐閣、平成 28 年 10 月
- ・伊藤 誠『マルクス経済学の方法と現代世界』桜井書店、平成 28 年 9 月
- ・伊藤 誠『資本主義の限界とオルタナティブ』岩波書店、平成 29 年 2 月
- ・藤田昌久、ジャック・F・ティス『集積の経済学 都市、産業立地、グローバル化』東洋経済新報社、平成 29 年 1 月
- ・江崎玲於奈『「未知」という選択 世界のレオ創造の軌跡』神奈川新聞社、平成 29 年 1 月
- ・益川敏英、沢田昭二『今をどう生きる 科学・震災・核・被曝を語る』旬報社、平成 28 年 10 月
- ・佐藤勝彦 (監修)『宇宙 138 億年の謎を楽しむ本 星の誕生から重力波、暗黒物質まで』PHP 文庫、平成 29 年 2 月
- ・佐藤勝彦 (監修)『宇宙には、だれかいますか? 科学者 18 人にお尋ねします。』河出書房新社、平成 29 年 2 月
- ・岩崎俊一『垂直記録とビッグデータ 豊かな文明を築いた日本の独創技術 “死の谷”を越えたイノベーションの神髄』日経 B P コンサルティング、平成 28 年 11 月
- ・吉川弘之『科学と社会の対話 研究最前線で活躍する 8 人と考える』丸善出版、平成 29 年 3 月
- ・本庶 佑『PD-1 抗体でがんは治る 新薬ニボルマブの誕生』岩波書店 (電子書籍)、平成 28 年 10 月

編集後記

今回発行しました第 19 号のニュースレターでは、平成 29 年度日本学士院賞受賞者と新会員の紹介や第 13 回学術奨励賞の受賞者紹介及び同賞受賞者寄稿、会員寄稿のほか、本院所蔵貴重図書・資料のオンライン公開などについて掲載しております。ご寄稿いただきました先生方には心より御礼申し上げます。

今号の講演会レポート (P. 13) の 2 つ目に中学生・高校生を主な対象とした「学びのススメシリーズ講演会」の報告がありますが、第 9 回目となる同講演会には約 100 名の聴講者のうち中学生・高校生あわせて 15 名の参加がありました。講演後のアンケートでは「学校の授業では 1 つのことを深く教えてもらわないので、とても面白かった。」「歴史で名前しか聞いたことがなかったの、政策を聞いてとても良い経験になった。」といったような主催者側にとっても喜ばしい感想が多く見られました。本院では第 10 回も企画する予定ですので、次号でご案内させていただきます。

また、本院では一般の方々を対象に「公開講演会」を毎年春・秋 2 回開催しています。春季は全国各地、秋季は東京・上野の本院会館での開催となりますが、今春は 5 月 20 日 (土)、徳島大学において開催します (P. 14)。会場の長井記念ホールは、今号「学問の山なみ」から (P. 9) で紹介しています長井長義会員のご令孫とご家族からのご寄附によるものだそうです。会場近くの薬学部玄関には、「1866 年 11 月長井長義はこの石を踏み長崎へ旅立った」と書かれた銘文とその「青石」が埋め込まれています。四国・徳島では初めての開催となりますので、皆様奮ってご参加ください。

(H)

※受賞者、新会員の肩書きは、発表当時のもの。

◎お問合せ先

日本学士院

〒110-0007 東京都台東区上野公園 7-32

電話：(03)3822-2101

FAX：(03)3822-2105

E-mail：gkjimu@mext.go.jp

第 19 号：発行日：平成 29 年 4 月 28 日

(年 2 回 4 月、10 月発行)

ホームページもご覧ください。

<http://www.japan-acad.go.jp/>